

ソニーライフ・エイゴン 生命保険株式会社

IBM UrbanCode Deployを活用して
デプロイ作業を自動化
アプリケーションのリリース運用の効率化と
ガバナンス強化を目指す



お客様情報



ソニーライフ・エイゴン 生命保険株式会社

●本社所在地
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-52-2
青山オーバルビル
<http://www.aegonsonylife.co.jp/>

ソニー生命保険株式会社とエイゴングループのエイゴン・インターナショナルB.V.の合併により、2009年12月に営業を開始。世界25カ国以上で事業を展開するエイゴングループが強みとするリタイアメント(退職者)向け商品や銀行窓販に関する高いノウハウと、ソニー生命が一人ひとりのライフプランに合わせたコンサルティングセールスを通じて培った質の高いサービスを融合し、革新的かつ高品質な商品とサービスを日本市場で提供すべく設立された。少子高齢化社会の進展により、個人の自助努力による退職後の経済保障がますます重要視される中、人生におけるさまざまなステージで契約者を支え、描いた夢や想いを実現に導き、将来に向かって安心や希望をもたらす「人生年金」を提供する年金保険商品のエキスパートを目指している。

ビジネスの競争力を高めていくためには、高信頼の業務遂行を支え、差別化の源泉となるアプリケーションのタイムリーな開発やバージョンアップが欠かせません。ただ、そのリリースにまつわる多くのプロセスを人手に依存しているのが実情で、システム管理者の負荷増加、ヒューマン・エラーの発生、運用スキルの属人化などの弊害を招いています。ソニーライフ・エイゴン生命保険株式会社(以下、ソニーライフ・エイゴン生命)は、この課題を解決するためにIBM® UrbanCode Deployを導入。アプリケーションのデプロイや操作の正当性を実証するエビデンス取得をはじめとする作業を自動化することで、リリース運用の効率化とガバナンス強化を推進しています。

人に依存したマニュアル作業から脱却し 自動化を指向したリリース運用へ

ソニー生命保険株式会社とオランダのハーグに本社を置く世界的な年金保険のリーディング・カンパニーであるエイゴン・インターナショナルB.V.が合弁し、2009年12月に営業を開始したソニーライフ・エイゴン生命。「個人年金を人生年金へ」をスローガンに掲げ、年金保険を中心とした商品とサービスを提供しています。このビジネスをあらゆる面で支えているのがITシステムで、同社は「少数精鋭」の体制のもとで高品質なアプリケーションの開発と運用を追求しています。

その取り組みには解決すべき課題がありました。同社 情報システム部 システム業務課の統括課長を務める馬場 正晴氏は、「特に問題視していたのが、アプリケーションのリリース業務です。人手を介する限り操作ミスや勘違いなどのリスクが避けられません。また、内部統制の観点からも、正式に承認されたモジュールが正しい場所にデプロイ(配置)されていること、途中でコードが改ざんされていない正当性を裏付ける操作のエビデンス(証拠)を取得することなどが必要ですが、これにも煩雑な手間がかかります」と話します。

同社 情報システム部 システム開発2課の小高 友美氏も、「アプリケーションのデプロイに際しては、アプリケーション開発を委託している社外パートナーと段取りをすり合わせるほか、作業後も所定の確認を行う必要があり、関連する作業は山のように発生します。2~3名の担当者がこうしたリリース業務にあたっているのですが、毎月80~100時間の工数を費やしているのが実情でした」と言葉を続けます。

また、同社は募集代理店に対して夜10時までITサービスを提供しているため、作業はどうしても深夜に及んでしまいます。「担当者のワーク・ライフ・バランスを適正化する観点からも、労働環境の改善が急務となっていました」と話すのは、



事例概要

課題

- アプリケーションのリリース運用の効率化とガバナンス強化

ソリューション

- IBM UrbanCode Deploy

効果

- これまで1時間かかっていたリリース関連作業が10分で完了し、リリース担当者の負担が軽減された
- 作業過程でヒューマン・エラーが発生するリスクも激減し、アプリケーションの品質が向上した
- 社外の開発パートナー各社に対して、IBM UrbanCode Deployの使用を前提とした開発のルールづくりや納品手順の整備を進め、アプリケーション開発に対するガバナンス強化を目指す土台を準備できた

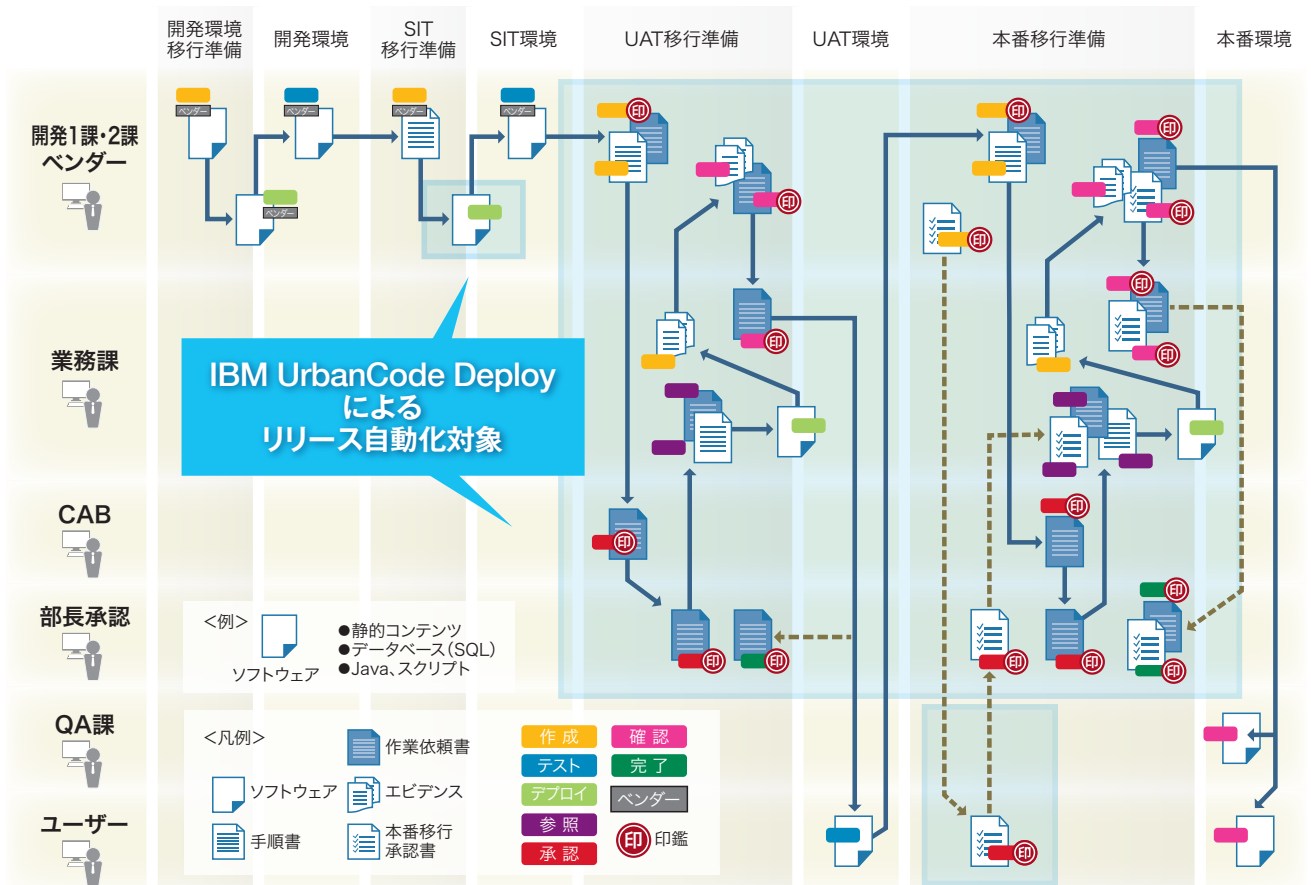
同社 情報システム部 システム品質管理課の統括課長を務める高見 泰之氏です。

こうした課題を解決すべく、同社はアプリケーションのリリース業務の“自動化”に向けた取り組みを開始しました。

テスト環境と本番環境をまたいだリソースの一元管理で段階的なデプロイ作業をサポート

一口に自動化といっても、さまざまなレベルがあります。毎回同じオペレーションを単純に繰り返すだけならスクリプトでも対応可能です。しかし、エビデンスの取得をはじめ、開発チームと運用チームが緊密に連携したいいわゆる“DevOps”の強化、アプリケーション・モジュールのバージョン管理、デプロイに失敗した場合のロールバックまで含めた自動化を実現するとなれば、専門ツールが必要となります。ソニーライフ・エイゴン生命は、事前調査から2社の製品に絞り込んで比較検討を行い、その結果としてIBM UrbanCode Deployの導入を決定しました。IBM UrbanCode DeployはさまざまなOSやミドルウェアに対応したプラグインとよばれる部品をパレットからドラッグ&ドロップで配置することによりビジュアルにデプロイ・プロセスを定義することができます。また、セキュリティー権限設定による役割に応じた操作の制限、承認フローの組み込み、ダッシュボードによるデプロイの可視化といった特長を備えています。

アプリケーションの開発からリリースまでの流れ (開発環境→テスト環境→本番環境)



※SIT=System Integration Test UAT=User Acceptance Test CAB=Change Advisory Board(変更諮問委員会)

出典:ソニーライフ・エイゴン生命保険株式会社

“情報提供や製品のハンズオン・セミナーの実施に加え、2015年11月から12月にかけて実施した入念なPoC(概念実証)で的確なアドバイスを受け、自社でIBM UrbanCode Deployを本格的に活用し、運用できる確信を持つことができました”



ソニーライフ・エイゴン
生命保険株式会社
情報システム部
システム業務課
統括課長
馬場 正晴氏

“これまで1時間かかっていた作業がわずか10分で完了するようになり、リリース担当者の負担が大きく軽減されました。併せてヒューマン・エラーが発生するリスクも激減し、アプリケーションの品質向上にも貢献しています”



ソニーライフ・エイゴン
生命保険株式会社
情報システム部
システム品質管理課
統括課長
高見 泰之氏

その中でも決め手となったのは、アプリケーションのテスト環境と本番環境をまたいだリソースの一元管理の仕組みです。

「弊社では開発側から受け取ったアプリケーションを、まずSIT(System Integration Test)環境で動作をテストし、次にUAT(User Acceptance Test)環境に移して業務部門での受け入れテストを実施し、問題がないことを確認した後はじめて本番環境に反映するという段階的なデプロイを行っています。そのすべての環境で『完全に同じモジュールが使われている』ことを担保・実証する必要があります。この要件を満たす最も扱いやすい仕組みを備えていたのがIBM UrbanCode Deployでした」と小高氏は話します。

さらに、同社がIBMを高く評価するのが、提案段階からの手厚いサポートです。「情報提供や製品のハンズオン・セミナーの実施に加え、2015年11月から12月にかけて実施した入念なPoC(概念実証)で的確なアドバイスを受け、自社でIBM UrbanCode Deployを本格的に活用し、運用できる確信を持つことができました」と馬場氏は話します。

1時間かかっていた作業を10分以下に短縮し リリース担当者の負荷軽減に貢献

正式にIBM UrbanCode Deployを導入したソニーライフ・エイゴン生命は、2016年の年明け早々より実際のリリース業務での活用を開始。「最初から100%の自動化を目指すのではなく、できるところから動かしてみる」というスタンスで臨みました。

そこでの大きな役割を担ったのが小高氏です。「最初のうちこそ若干の戸惑いがありましたが、いったん“考え方”をつかんでしまえば、操作はきわめてシンプルであることがわかりました」と話す小高氏は、自らが開発と運用をつなぐライブラリ的な存在となってリリース担当者からの質問対応にあたるほか、簡単な操作マニュアルの作成や開発・品質管理・運用チーム全体を対象にした講習会の開催などに率先して取り組み、IBM UrbanCode Deployの定着化に努めました。こうした取り組みが功を奏し、同年4月には90%近いアプリケーションで、デプロイおよびエビデンスの取得がIBM UrbanCode Deployで行われるようになりました。この結果、まず表れたのがデプロイの時間短縮の効果です。「これまで1時間かかっていた作業がわずか10分で完了するようになり、リリース担当者の負担が大きく軽減されました。併せてヒューマン・エラーが発生するリスクも激減し、アプリケーションの品質向上にも貢献しています」と高見氏は話します。

一方で同社は、社外の開発パートナー各社に対しても、IBM UrbanCode Deployでのデプロイやエビデンス取得を前提としたアプリケーション開発のルールづくりや納品手順の整備を進めています。これまでパートナーそれぞれの流儀に任せてきたアプリケーション開発のあり方を、根本から見直していこうとしているのです。

「各社から納品されたモジュールをよりスムーズにリリースできるようにするという狙いも当然ありますが、それだけではありません。あいまいだったルールをあらためて統一し、すべての関係者に徹底することで、アプリケーション開発に対するガバナンスを強化したいと考えています。その土台を提供してくれたことは、IBM UrbanCode Deployの隠れた最大の成果と言えそうです」と馬場氏は話します。

“すべての環境で「完全に同じモジュールが使われている」ことを担保・実証する必要があるのです。この要件を満たす最も扱いやすい仕組みを備えていたのがIBM UrbanCode Deployでした”



ソニーライフ・エイゴン
生命保険株式会社
情報システム部
システム開発2課
小高 友美氏



左から高見氏、小高氏、馬場氏

ワークフローとの連携により 自動化の次のステップに向かう

アプリケーションのリリース作業の自動化に向けたソニーライフ・エイゴン生命の取り組みは、今後もさらに前進していきます。

喫緊の課題は、デプロイに失敗した際の対応です。「できるだけ早期にロールバック機能の実装に取り組み、人手に依存した作業を極力なくしていきたいと考えています」と小高氏は話します。

また、IBM UrbanCode Deployと申請フローの連携も着手したいと考えています。システムに対して何らかの変更を行う際には、必ず責任者の承認を受けることが義務付けられていますが、現在その手続きは紙ベースの書類によって行われているのが実情です。「ワークフローを統合していくことが、業務の効率化のためにもガバナンス強化の観点からも必要です」と馬場氏は、今後の方向性を見据えています。

ただ、こうしたワークフローについては、アプリケーションのリリースだけでなく、全社のあらゆる業務を包括した仕組みを検討しなければなりません。「私たちのビジネスにとってどんなワークフローが理想的なのか、その場面でIBM UrbanCode Deployが持つ承認フローをどのように利用できるのか、今後もIBMには大局的かつ総合的な視点から継続して課題解決の相談に乗ってほしいと思います」と馬場氏は話します。

アプリケーションのリリース業務を起点とした同社の自動化への取り組みは、次のステップに向けた歩みを開始しているのです。



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

© Copyright IBM Japan, Ltd. 2016

All Rights Reserved

05-16 Printed in Japan

IBM、IBMロゴ、ibm.com、およびIBM UrbanCodeは、世界の多くの国で登録されたInternational Business Machines Corporationの商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれIBMまたは各社の商標である場合があります。現時点でのIBMの商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtmlをご覧ください。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

このカタログに掲載されている情報は2016年5月のものです。事前の予告なしに変更する場合があります。

本事例中に記載の肩書きや数値、固有名詞等は初掲載当時のものであり、閲覧される時点では変更されている可能性があることをご了承ください。

事例は特定のお客様での事例であり、すべてのお客様について同様の効果を実現することが可能なわけではありません。

製品、サービスなどの詳細については、弊社もしくはIBMビジネスパートナーの営業担当員にご相談ください。